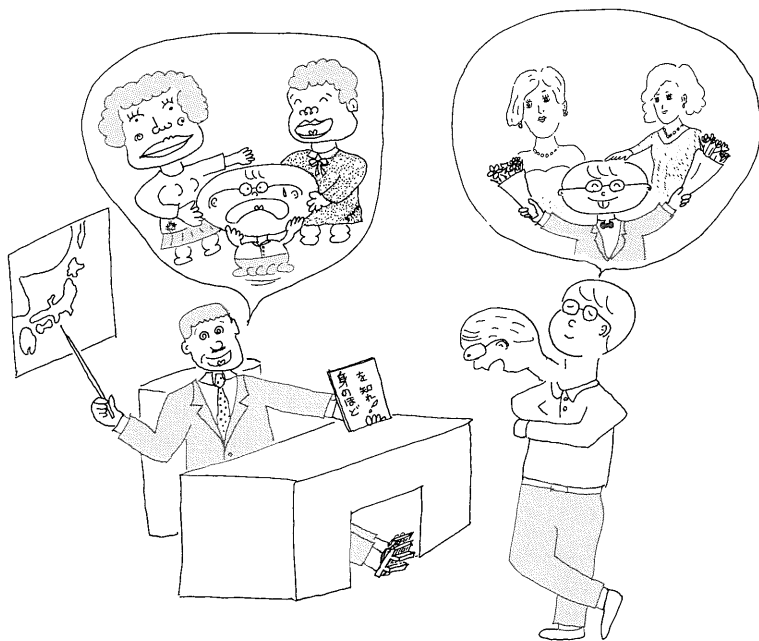


# フレンド シップ アムール川を流れて下る友情船

協 田 浩 二<sup>1)</sup>



## プロローグ

“ヤーレン ソーラン ソーラン ソーラン  
 ソーレン ソー連 ソー連 はい はい  
 招待きたけど お前がぁ行けよぉー  
 頼りないけど ヒマァーそうだぁネ!”

と軽快なソーラン節に乗せられて、ソ連のハバロフスクに行くことになった。「北西太平洋のテクトニクスと鉱物・燃料資源に関するシンポジウム」に参加するためである。

ハバロフスクは、日本海を隔てた遙か彼方。私にはおおよそ縁がない、そう思っていた。しかし、最近になって少し事情が変わってきた。私が日頃調べている日本の中部部、美濃帯の地層の延長がどうもハバロフスクの近くにありそうだということが分ってきたからだ。今からおおよそ1,500万年もの昔に日本海がズズズーッと開くまでは、日本はユーラシア大陸と地続きであったと考えられている。もちろんその頃は地層や岩石も連続していた筈だ。

その証拠を最近名古屋大学の小嶋智氏がハバロフスクと国境を挟んだ中国側で発見した。そこには日本の中部地方(美濃帯)と岩相・地質時代がそっくりな地層が分布している。ハバロフスクにもきつとある。日本で、美濃帯で私が見慣れたあのチャートが、珪質頁岩が……。

そう思うとハバロフスクが急に身近に感じられてきた。よし行こう! そう決めて早速出発の準備に取掛かった。ハンマー・クリノメーター・フィールドノートにカメラやフィルム、忘れちゃいけないビニール袋。すっかり用意が整った……と思ったら、講演の用意がなぁーんにも出来ていない。あわててスライドを作った。

さて出発が決まったけれど、ソ連とりわけハバロフスクってどんな所なんだろう。ロシア語を流暢に話すロシア人が沢山住んでいて、親玉がゴルバチョフとかいうおじさんらしいということぐらいしか私は知らない。そこで物知りな友達にちょっと聞いてみた。「ソ連ってどんなところ?」「あそこはなあ、その昔おそロシアとってとってもこわぁーい国だったんだぜ。いまでこそ世界一

1) 地質調査所 地質部

キーワード: ハバロフスク, アムール川

の大国だが以前は沢山の小国に分れていてそれぞれを子ロシアと呼んでいたそうだ。今でも殺し屋（ロシア）が沢山の国で、ゴルゴ13もロシアで生まれたらしいぞ。なんでもゴルゴバチョフ家第13代の当主だそうだ。」……聞くんじゃないか。

今度はハバロフスクに滞在の長かった叔母さんに尋ねてみた。「ハバロフスクってどんな所?」「そうねえ。食べ物はずいぶんいいし、大した物は売ってないし、景色も平凡で見る物もないし、水はずいぶんいいし、なにより美人がいはいわねえ……」やっやめた。とくに最後のがいけない。つくばと同じじゃないか。もうすっかり行く気がなくなったので部長に相談してみた。「あの一、美人がいはいというので行くのをやめようかと思うんですが……」すると、部長はすかさず美濃帯の地質図と鏡を出してきた。「きみ！ 美濃帯そっくりの地層が見たくないのかね？ それにホラ、きみの顔に釣りあう女は山ほどいると思うがなあ」……説得は成功した。

## 旅立ち

ハバロフスクへの飛行機は新潟から出る。この事実を知らない人は多いようだ。もちろん私も知らなかった。上越新幹線で新潟駅に降り立つと、まず食堂に行くことにした。私はソ連の食事について一人で不安な思いをするのはもったいないと思い、同行した地質調査所の4人（盛谷智之・神谷雅晴・岡村行信・角井朝昭の各氏）に「ソ連の食事はマズーイぞ！」と吹き込み、全員をしっかりと落ち込ませることに成功した。そして駅前の食堂で日本の食事に最後のお別れをすることにした。「刺身さん、さようなら、サンマさん、しのぶちゃんとなかよくしてネ。みそしるくん、泣くんじゃない！」

新潟空港にはもうアメリカや韓国からの参加者も到着していた。整然と列をなす彼等を尻目に私は走った。「すみませーん。その笹だんごください。それから胡麻せんべいに、某事件で売上げの落ちたグリコのアーモンドチョコにビスコね！」これだけ買えば2日は生きられる。準備万端整って、国際線のりばへと向かった。

アエロフロートはソ連の飛行機。「大丈夫かなあ。」と不安げに乗り込む。飛び立ってしばらくして、機内のあちらこちらから白いもやが立ちこめているのに気付いた。「空気が濁れてるんじゃないか?」「ガムテープを持ってくればよかった。」と不安げな会話が続く。それでも約2時間後、飛行機はハバロフスク上空に差し掛かった。眼下には、幅広い川が見える。アムール川だ。菱形の巨大な中洲が川の流れを示している。しばらくして私たちはハバロフスク空港に到着した。

ここハバロフスク空港はさいはての停車場みたいな空港で、小さい。私たちは狭い待合室で荷物の到着を待つが、これがなかなかやって来ない。すっかり夜も更けた頃、やっと税関を通ることになった。「あつ、きみ！」私の顔を見るなり税関吏は尋ねた。「ビデオや雑誌は持ってないかね?」見上げた目はイヤラシさに満ちあふれている。どうも adult ビデオやエロ本のことを言っているらしい。頭にきた私は「No!」と大声を張り上げてすり抜けた。そして「ひどいよなあ。そんなこと聞かなくて。」とぶぜんとしていると、みんな不思議そうな顔をしている。「えっ? おれたち誰も聞かれてないよ。顔を見て聞くことにしたんじゃないの?」……品性が顔に出る。うーむ、そうかもしれない。

## 第一夜

ホテルは、アムール川にほど近い“インツーリストホテル”である。このホテルに夜遅く着いた。空港でかなりの時間待たされたからである。部屋に荷物を置いて、すぐ食堂に向かった。いよいよソ連のお食事との御対面だ。ちょうど日本人の団体さんが、食事を終えて席がバラバラと開きはじめている。「よかった。さあ席に着こう。」と入口から一歩踏出すと、ロシア人のオパタリアンに呼び止められた。ロシア語はさっぱりわからないが、どうも待てということらしい。どこの国でもオパタリアンに逆らっては生きてはいけない。じっと待つことにした。

私たちが機内食を食べてからかれこれ8時間は経っている。どんな食事が出てきてもきつとおいしいにちがいない。「まずい」ロシア料理になれるための儀式だと思って私たちは我慢した。それにしてもなかなか呼ばれない。通りかかるウエートレスはかなり太っていて waitress というより weight デスという感じだが、彼女らにいくら声をかけても黙ってすり抜けてゆく。どうも、席に案内する人やそれぞれのテーブルに料理を持ってくる人がしっかり決まっているらしい。決った仕事以外はまったくしないので、私たちはやたらと声をかけるのを諦めて、席に案内してくれる係のおばさんの指示をじっと待った。

どれくらい時間がたっただろう。空腹の私たちにはほとんど永遠と思えるほどの時間が経った頃、ようやくレストランの奥の席に案内された。しかし安心してはいけない。単に座っただけなのだ。テーブルの周りでは、せせせとテーブルクロスが片付けられている。ひとつおいた向こうのテーブルでは数人のウエートレスが集まって今日の売上げでも計算しているようだ。調理場では皿を

洗う音が響いている。もうほとんど閉店の状態のなかだ。「本当に料理が来るんだろうか？」一人が不吉なことをいう。果たしてこの心配は的中してしまうのか。一同不安そうにテーブルの係のおばさんを目で追った。

来た！ しばらくしてついに一皿の料理が五人の座るテーブルに置かれた。とても大きいとはいえないその皿には、トマトが数切れ載っている。「ははーん、前菜だな。」こんなものでお腹を膨らしてはメインディッシュが食べられない。そう思ってみんな遠慮がちに食べている。この皿が下げられた後、ウェイトレスが湯気の立ち上るお盆を持ってきた。ハバロフスクの夜はもうすっかり涼しくなっている。暖かい食べ物はなによりの御馳走だ。「待ってました！」そう声を掛けたいような一瞬だ。しかし、テーブルに置かれたのは、5個のティーカップだけだ。ウェイトレスの目には、すべての料理を出し尽くしてもう帰れるわという安堵の色が見える。「うっそう！ トマトだけでおしまいかな。ソ連にはもう食べ物がないのか。」私たちは、空腹と絶望のあまり、席を立つことができないでいた。震える手でお茶を飲み干し、あたりを恨めしそうに見渡した。シンポジウムの係員が血相を変えてやってきてレストランのオバタリアンに掛合ってくれた。そしてやっと調理場で何かを作り始めた。しばらくして出てきたポテトと肉で、私たちがやっとお腹の虫を納得させることができた頃はもう夜半近くになっていた。その夜の夢はもちろん滞在中毎日トマトだけで過ごすという悪夢であった。



ならず、時差が2時間ある。朝7時起床で8時に食事、9時にシンポジウム開始ということは、日本でいえば5時起床、6時朝食、7時からお仕事と同じ感覚になる。日の出の前に目を覚まし、寝ぼけているうちに朝食だ。シンポジウムが始っても目もとパッチリとはほど遠い顔をしている。これで講演とポスターセッションが夕方7時までであるので、かなりの難行苦行である。

講演の内容は、北西太平洋地域のテクトニクスや燃料・鉱物資源に関するものばかりで、お互いに近接した地域だけに発表内容に関心が強く、しばしば議論が白熱した。とくに、アメリカ人が発表するアラスカの地質や構造発達史にはソ連の研究者の噛みつかんばかりの反論があり、領土問題が尾をひいているのだなあと議論の根の深さに思いをはせた。

ソ連の発表者は極東における付加テクトニクスやそれに関係した資源の話をして、私たちを驚かせた。ソ連の学者はプレートテクトニクスに対して懐疑的だと一般に

## シンポジウム

この国際シンポジウムは、ソ連科学アカデミー、ソ連地質省、環太平洋エネルギーおよび鉱物資源協議会、米地質調査所の主催で1989年9月2日から9月7日まで開催された。初日のオープニングセッションから始まり、テクトニクス、海洋地質、鉱物資源、燃料資源、クロージングセッションと日替りメニューの毎日だ。参加者は約230名。ソ連(約150名)を中心にアメリカ、日本、中国、韓国、北朝鮮、ラオス、ベトナム、シンガポール、オーストラリアなど環太平洋諸国から人々が集まっている。講演は、英語もしくはロシア語で行われ、それぞれを通訳が同時通訳してゆく。ソ連の地質屋は当たり前として、中国・北朝鮮・ベトナムといった国々の各講演者が流暢なロシア語で話すのには仰天した。なるほど世界には東と西があるのだなあ、心から実感した。

講演は朝8時から始る。これは、普通の様でふつうではない。ハバロフスクは日本の神戸などとはほぼ同じ経度にあり、日の出、日の入りがほぼ同時刻であるにもかかわらず

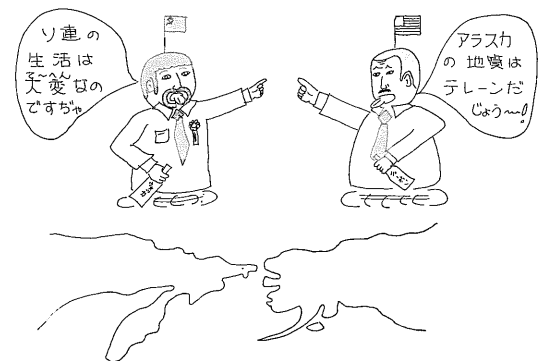




写真1 シンポジウムのオープニングセッションの開かれた会場

信じられていたからだ。しかし、予想に反して講演でも、ポスターセッションでも、ソ連の研究者の話は日本やアメリカで議論されているのとさして変らない“付加テクニクス”だ。しかも、放散虫化石で細かく地質時代が決められている。「ずいぶん研究が進んでいるぞ。情報が入ってこないだけなんだなあ」と思ったが、その理由はすぐ分った。ソ連の研究者からもらった沢山の研究論文がすべてロシア語で、なあんにも分らない。この発音するのも困難な言葉はどうにかならないものだろうか。

各国の研究者の講演には国情が反映している。日本やアメリカの研究者のスライドはカラフルでとてもきれいだ。反対に、ソ連・中国・北朝鮮のスライドは文字ばかり多いし、暗くてモノトーンときている。特に、北朝鮮の発表は見事で、30分の講演時間をたった1枚のわらばん紙で済ました。このわらばん紙をOHPで無理やり透かして見せるのだが、タイプした文字など全く読めない。双眼鏡で覗くと、消しゴムで必死に消したのか大きな穴が開いていて、その上をピップエレキバンくらいのちいさな紙片で貼ってあるのがみえる。聴衆は初めもしくは途中で退席しまい、ほとんど残っていない。私は社会勉強にと最後まで観察させてもらった。

シンポジウムの間いろいろなイベントが企画されていて、ソ連のすごい歓待ぶりをうかがわせる。初日には、バスでの市内観光と船によるアムール川の遊覧があり、夜はレセプション。シンポジウムの後半には地質博物館、自然史博物館およびテクニクス地球物理研究所の見学があった。しかし、圧巻だったのは、第2日目の夕方に研究所の講堂で催された観劇である。私たちが、バスを降りるやいなやケバケバの化粧をした娘たちがキャッホーと奇声を上げながら、研究所の入口を飛び出してきた。その姿は、街やホテルで見かける無表情なロシア人とは全く違っていた。ペレストロイカでこのような劇が自由に出来るようになったと劇中で言っていたが、ま



写真2 シンポジウム会場（中央の低い建物）

だ自由に慣れていないのだろうか、ふざけかたが常軌を逸してどこか気持ちが悪い。異常な笑いとそれをムスとして無言で見ているロシア人研究者のコントラストがとても不気味だった。

### ハバロフスク市内

シンポジウムの前後や途中、あらゆる機会を利用して街の中を歩いた。シンポジウムの初日にバスで市内を一巡りしたので大体の土地勘は出来ていた。ハバロフスク市街は人口の割にこじんまりとしている。市内を歩いても、別に殺し屋がいっぱいいるようでもなく、ブスばかりというわけでもなさそうだ。きっと、私に釣りあった美女がいるに違いないと心をときめかせて歩いた。

ホテルからシンポジウム会場まで徒歩で約20分。この間にデパートやみやげもの屋、食堂に本屋さん、なんでも揃っている。街頭では食べ物や衣類を売る人の周りに人垣ができています。普段はそうでもないが、たばこや安い衣類を売り始めると、我先に人が集まり人垣どころか、人々が団子になってしまう。デパートではフランス



写真3 ハバロフスク地質博物館の展示室



の香水を売り出した途端、ハバロフスク中のオパタリアンが集まったと思えるほどの騒ぎになった。何を売っているのかなと、面白半分に覗いた私は無残にも弾き飛ばされてしまった。

市内で売っているものは、円に換算すると一般に高い。交換レートと実勢が異なる為だ。高い上に、これは素敵だと思うものが少ない。電気製品・日用品どれをとっても日本のものには叶わない。但し、本や地図は安い。巨大な地図が60円位だ。みやげものは、外人専用の店で買う方が安いし、品物が豊富だ。この店やホテルのなかで唯一アルコールのあるバーなどは円かドルで支払わなくてはならない。したがって、せっかく両替したルーブルがほとんど使えない。財布からは円ばかり減ってルーブルが残る。この感じを、ルーブル徴出感という。

市内を歩いてもたいして危険な目には会わないけれども、昼間からしばしば変な若者に付きまといられる。とくに、ホテルの周囲でその傾向は顕著だ。彼等はしばしば日本語を流暢に操り、時には親切にカメラのシャッターを切ってくれる。そして最後には、決まって「外国タバコを買ってきてくれ。高く買い取るから。」と喋ってくる。ときに留学もしたことのあるような高学歴者のこのような生活がとても哀しかった。

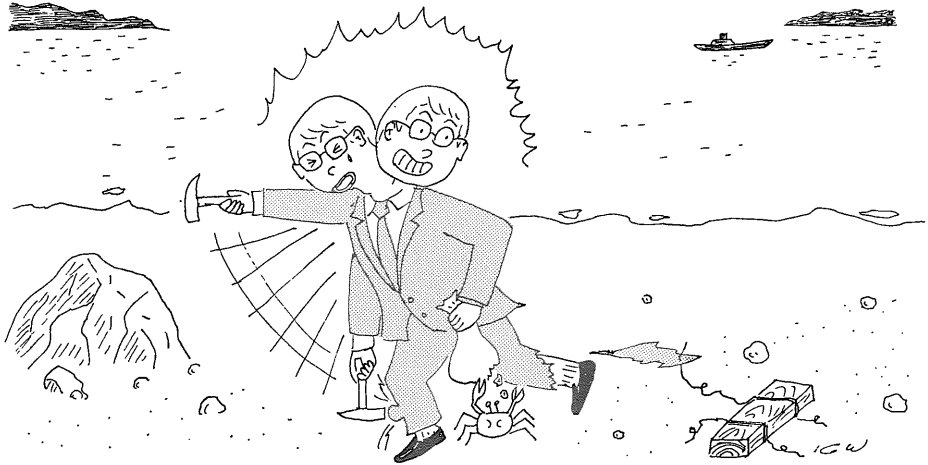
シンポジウム会場からすこし行ったところに市場がある。市場は朝がいいと聞かされて、朝早く出かける。丸くて緑で縞模様のないまぬけなスイカが沢山並んでいる。胡瓜に茄子も日本のものよりすこし大きめだが日本で馴染み深いものだ。野菜や果物の種類は実に豊富だ。ホテルのレストランではトマトとじゃが薯、肉と鮭が毎日繰り返され、私はソ連にはこれだけしか食べ物が無いものと信じていたので大変驚いた。ホテルのコックさん

もたまには市場に買物にきてほしいなあとしばしばやいた。

市場にこれだけ食べ物があるのだから、魚市場はもっと楽しいだろうと地図を頼りにでかけた。しかし、地図がおかしいのか、頭がおかしいのか、なかなかたどり着かない。近所の子供たちに魚の絵を描いて道を尋ねるが、「きゃはっはっはあー」と笑って逃げまわるばかりだ。絵心のわからない子供たちだと、今度は道行く人に次々と尋ねるが、わからない。いったいどれほどの人に尋ねただろう。もしかして、ソ連では魚の形が四角なのかも知れない。と思悩みはじめていると、一人の老女がやっとわかってくれて魚市場の場所を教えてくれた。人生経験が豊富でいろいろな形の魚を知っていたに違いない。ともかく、魚市場に着いた。夕方のせいかな鮮魚はなく、缶詰か干物ばかりだ。なかでも缶詰がやたらと多い。一つのスーパーマーケットくらいの広さの建物にビッシリ並んでいる。どれ1つおみやげに買って帰ろうとあれこれ見て回っているうちに、奇妙なことに気が付いた。どの棚をみても缶詰の種類にほとんど変化がない。同じ種類の缶詰がなんども繰返して並んでいる。広い建物に数種類の缶詰がずらっと並んでいる様を見て啞然として帰った。

## ハバロフスク周辺の地質 その1

今回ソ連とりわけこのハバロフスクを訪れた最大の目的は、日本の地質とくに私が長年調べている岐阜県周辺(美濃帯)とよく似た地質体・地層をみることだ。そのチャンスは思っていたよりずっと早くやってきた。シンポジウム初日・アムール川遊覧の船を待つ間30分の時間が



あった。私はぼうっとアムール川を眺めていたが、名古屋大学の小嶋智氏が向うにみえる露頭を見に行こうと言いだした。小嶋氏は私と同じ美濃帯を研究しているばかりではなく、ハバロフスクと国境を隔てた中国側の地層も研究しており、ハバロフスクの地質には人一倍興味を持っている。二人は連れだって露頭に向かった。しかし、私たちはこのときうしろをそとついでくる人影にまだ気がついてはいなかった。

展望台の真下に露出するその石は紛れもなく、チャートだった。赤褐色や灰色を呈したその石は、私たちが長良川や木曾川で見慣れた層状チャートそのものだった。こんなに早く会えるなんて夢の様だ。きっと地質時代も日本のものと近く、二疊紀か三疊紀だろう。そう思うとやもたてもたまらず、いそいでビニール袋を取り出し集めた石を入れた。

ああハバロフスクに来て良かった。小嶋氏と手を取りあって喜んでいて、うしろから髭をたくわえた外人が日本語で話しかけてきた。「ああ、それ三疊紀中期のチャートですね。日本とそっくりでしょ。」声の主はフランス人の M. Faure 氏であった。彼は日本で長く研究し、日本の地質に詳しい。このハバロフスクにもすでに一年前に来ていてこのチャートについてもすでに調べていた。感動の涙はすつと引き、ついでに血の気もひいてきた。「そっそうですね。日本にそっくりですね。ハハハ……」と力なく笑ってその場をごまかした。

## ハバロフスク周辺の地質 その2

9月7日のシンポジウム終了後、ハバロフスク郊外の地質巡検に行くことになっていた。ただし、どこに何を見に行くのか事前になにも知らされていなかった。このようにスケジュールが前もって知らされないのはこのシ

ンポジウムでは日常茶飯事だったのであまり気にしてはいなかった。これが思わぬ不幸を招くとは、私にはまったく思いもよらなかった。

そもそもこの9月7日の巡検は、あまり興味がなかった。翌日には今回の訪ソのメインイベント、アムール川流域の地質巡検が始まる。そこで、美濃帯そっくりな地層がたっぷり見られるし、そこで沢山試料を取って研究しようとして張り切っていた。今日はどうせハバロフスク郊外のチンケな露頭をちょっと見に行くだろうぐらいに考えていた。だから、シンポジウムに出席した服装のままできたし、試料を入れるビニール袋や予備のフィルムはみんなホテルに置いてきた。

ところがどうだろう。私たちを乗せたバスは、どんどん走って明日訪れるはずだったアムール川の大露頭へやって来てしまった。どうも予定を変更して明日見るはずだったこの露頭を今日見て、明日からはアムール川の遙か上流で美濃帯の地層とは全く違ったタイプの地層を見に行くらしい。たまった大変だ。今日一日で私がソ連をハバロフスクを訪れた目的の大半が終ってしまう。今日のこの日のこの露頭のために日本から持ってきた有り余るほどのビニール袋やフィルムはホテルに置き去りにされている。そればかりではない。この露頭の詳細なスケッチが乗っている案内書も明日に備えて、ホテルのテーブルに開いたまま放置されている。私はあわてて小嶋氏のもっている案内書のスケッチを写し取ったが、あとはなすすべもなく、ただ茫然と立ちつくした。

私は巨大な絶望の中にいた。案内者の声が遠くで響く。足取りは重く、まるで進まない。金縛りにあったようだ。こんなことではいけない。わたしは地質屋だ。そう思い直して、思いきり力強く一步を踏み出した。びりっ！ 大きな音がして私のズボンが裂けてしまった。



写真4 ハバロフスクコンプレックスの層状チャート（右下は、地調角井氏）

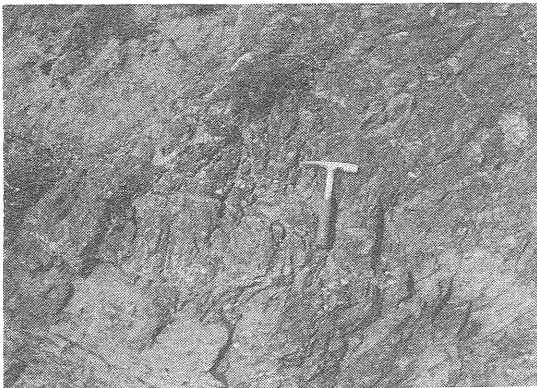


写真5 ハバロフスクコンプレックスのメランジ（泥岩基質に砂岩・珪質頁岩・チャート・玄武岩の岩塊を含む）

金縛りにあっていたのではなく、落ちていた針金にズボンが引っかかっていたのだ。シンポジウムの服装のまま上等な恰好で歩いていた私は無残なまでに落ち込んだ。

この日の案内者は、テクトニクス地球物理研究所のボリス・ナターリン氏とセルゲイ・ジャブレフ氏である。彼らは、このハバロフスク郊外の鉄橋附近に露出する地質体をハバロフスクコンプレックスと呼んでいる。岩相・構造・地質時代は詳細に調べられており、案内書を読んだとき、この地層は私たちが日本でとりわけ美濃帯でみている地層によく似ていると思った。露頭で観察してみても、その感を一層強くした。赤褐色の層状チャート、赤褐色ないし灰緑色の珪質頁岩、泥質基質にチャート・珪質頁岩・玄武岩のブロックの入ったメランジ。どれも私たち日本の地質屋にお馴染みのものばかりだ。地質時代もたいそうよく似ていて、チャートは三畳紀中一後期、珪質頁岩はジュラ紀前一中期の化石を産する。少し違うのは、珪質頁岩やチャートに赤褐色の部分が多いことと、メランジの変形がやや強いことぐらいだ。「この



写真6 アムール川巡検のとき乗った船

地層は日本のものとそっくりだ。」と私がいうと、横でアラスカの研究者が「いやいやアラスカの方がそっくりですばい。」と高い鼻をひくつかせて威張っている。私は鼻の高さではかなわないので、精一杯鼻の穴を広げて「ぜったい日本の方が似てるってば！」と頑張ったが、所詮環太平洋の地質はぐるりよく似ている。

## アムール川の川下り

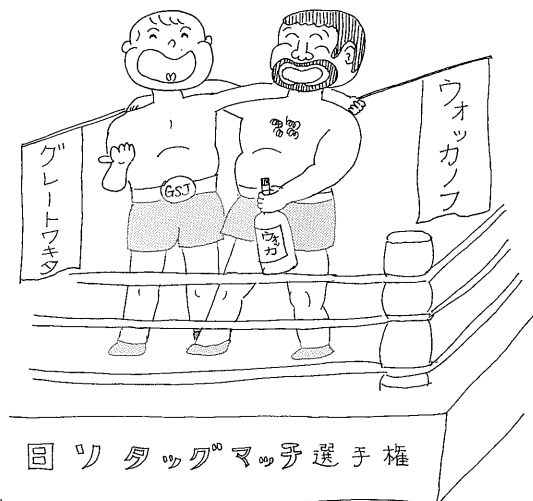
シンポジウムの全日程が終了し、9月8日から9月11日までアムール川流域の地質巡検にでかけることになった。ハバロフスクから大きな船で250kmほど北上し、ボロン湖の周辺で中生代のアムールコンプレックスの砂岩泥岩互層や新生代の火山岩を見る予定だ。

ふつう4日間の巡検という大した物でいろいろな地層や岩石を憶えきれないくらい見せられるのだが、この巡検は実におおらかで、行きに1日帰りに2日かかる。つまり中身が1日で旅行日が3日だ。アムールの流れはゆったりとしており、私たちを乗せた船はその流れに身を委ねるようにしてゆっくりと進んで行く。

ハバロフスクを離れてしばらくゆくと、昨日訪れた鉄橋の近くのハバロフスクコンプレックスの露頭がみえる。「ああ、あの美濃帯そっくりの地層ともお別れた。ズボンを破いたあのにつき針金はあのへんだったかなあ。」と胸の奥から不思議な感慨が湧いてきた。と、そのときだ。すれちがった巡視艇が突然Uターンして猛スピードで私たちの船を追ってきた。シベリア鉄道を無断で撮影していたのがいけなかったのだろうか。巡視艇の上にそびえる機銃が不気味に光っている。恐ろしい、しかし面白そうだ。私はとっさにカメラを構え、巡視艇に向けた。写したい、でも撃たれては大変だ。そうだ！私は目の前でボーッと立っている角井氏の後に隠れてシャッターを押した。彼のお腹なら絶対弾丸を通しそうに







そうはいかないのがロシアの風習か。船に戻ったとたん「おおワキータここにいたあるか」とウッカを振りふり現れた大男2人に呼び止められた。シンポジウムで知合った沿海州の地質の研究者たちだ。誘われて彼等の部屋にいくとロシア語の論文片手に沿海州の地質の説明が始まった。彼等は多くのロシア人の御他聞に洩れず、英語がほとんど話せない。「This is …… a …… map … of … me me me ……」と一言話し始めるとすぐ言葉に詰ってしまふ。こちらが黙って待っていると永遠に詰っている。「もしかして melange?」と聞くと「ダアー(そうやんけ)」とロシア語が返ってくる。「This is cha cha cha ……」。「おもちゃのちゃちゃちゃっ?」「ニエット(ちゃうがなあ)!!」「Chert?」「ダアー! ワキータ。ぐれーと、ぐれーと!」と、いった会話が続く。一通り論文の説明が終った頃、ウッカの匂いをかぎつけた人々が集まってきて、狭い船室は一杯になった。残り僅かになったウッカを分けあって、ギターに合せて、歌い踊り、大騒ぎだ。私も例によってでたらめな歌と踊りのオンパレード。「ワキータ、ワキータ」の大合唱がおこる。うーむ、意外なところで受けたな。こりゃ講演より評判がよいかもしれん。とひとりごちて自室に戻ったときは3時半を回っていた。

## アムールコンプレックス

翌目を覚ますと、船はもう別の場所に接岸していた。霞んだもやの向うに縞状に重なりあった岩石がみえる。アムールコンプレックスの砂岩泥岩互層である。私たちは今日一日おもにこの地層を観察するわけだが、この露頭自体は説明されることなく、私たちは別の小舟に

乗換え、ボロン湖畔の露頭へ向かった。小舟に乗って気付いたことがある。前夜一緒に夜中まで飲み騒いだ連中が一人も乗っていない。地質の見学は今日一日である。今日見なければ何をしにきたのかわからない。そう考えてハタと気付いた。彼等は晩餐会とウッカが目的でのこの巡検に参加したんだ。この日夜になってそととバーを覗いてみると、案の定彼等はウッカを囲んで談笑している。うーむ、大変な連中とつきあってしまった。後悔してももう遅い。私は一日ずきずき頭で巡検地を巡った。

この巡検の案内者は、ハバロフスクの時と同じボリス・ナターリン氏である。彼は構造地質学が専門で、今日の最初の露頭であるボロン湖東岸の砂岩泥岩互層において褶曲構造やそれに伴う小構造について詳しく説明してくれた。この地層はしばしば閉じた褶曲をしており、全体として単斜構造をしている。地質時代は所々から産するイノセラムスで白亜紀とされている。日本でいえば、四万十層群であろうか、はたまた和泉層群か。いずれにしても単調な地層である。

再び小舟に乗って、ボロン湖の中央に浮ぶ小さな島に向かった。ここで新生代の火山岩を観察した。この火山岩は綺麗なかんらん石や日本では見ることの出来ない白榴石を含む玄武岩ということで、私は専門でもないのに一生懸命石を採取した。ああ、せこい!

昼食のために母船に戻ったのは3時を回っていた。満腹してごろごろしていると、5時から次の露頭に行くのでまた小舟に乗れというアナウンスだ。最後の露頭はアムール川の東岸でここでもやはりアムールコンプレックスの砂岩泥岩互層だ。午前中の露頭と大差なく、うーむやっぱり互層は互層だ、御馳走とはちょっと違う……などと、夕食のことを考えているうち、日が暮れてきた。

## アムール川の川上り

翌日まだ夜も明けぬうちに船は岸を離れた。朝焼けが川面に、そして雲に映え、あたりは次第にピンク色に染まっていった。川面にたちのぼるもやは幻想のなかへと船を誘い、私は陶酔のひとときを過ごした。私たちの船はハバロフスクに向かってこのもやの中をゆっくりと廻りはじめた。

朝食を済ませたあと、10時から一番上のデッキにある会議室で、巡検の反省会が開かれた。司会者が「この巡検について議論しましょう」と提案したにもかかわらず、議論はすぐ北西太平洋周辺のテクトニクスへ向かった。国境で地質が途切れるわけでもないのに、中国とソ連、ソ連とアメリカというぐあいに、隣り合った国同志

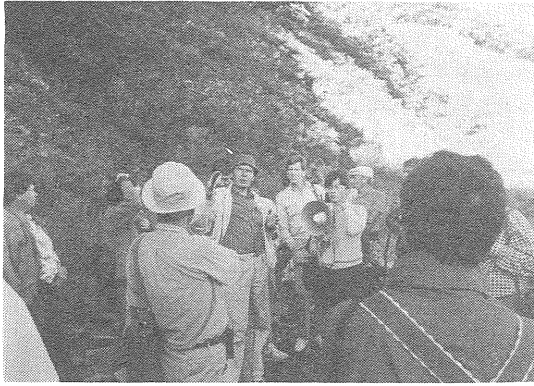


写真8 アムールコンプレックスの露頭を説明する案内者のナターリン氏（中央）テクトニクス地球物理研究所



写真9 アムールコンプレックスの砂岩泥岩互層

で激論になる。日本の小嶋氏のように複数の国を研究し、広い視野をもった人間が貴重である。

単に見解の相違ばかりではない。しばしば、話の土俵が全く異なる場合がある。シンポジウムの期間中はソ連の学者も付加テクトニクスを議論していると感じたものだったが、ここへきてシンポジウムで話をした人々がマイナーで実は多くの研究者が地向斜にひたひたと地層が貯まって行くイメージを引き摺っているらしいということがわかってきた。土俵の異なる議論はついに突りあるものとはならなかったが、中国やソ連の研究者の生の声がよく分って楽しかった。

午後は小嶋氏と誘いあわせてナターリン氏の部屋を訪れた。そこでナターリン氏やジャブレフ氏からハバロフスク周辺や極東地域全体の地質と研究現状を聞くことにした。ナターリン氏は先に述べた“わからんちん”とは異なり、世界の研究の現状にも詳しく非常に博学である。彼の説明する極東の地質は私たちにも分かりやすく、かつ新鮮であった。ジャブレフ氏は、走査型電子顕微鏡もなく世界各国の論文も手に入れ辛いにもかかわらず、極東地域で放射虫化石の研究をしている。私たちは、この巡検で観察した露頭はわずかだったが、彼らとの議論を終えたとき本当に来て良かったと思った。

船は早朝ハバロフスクへ着いた。ホテルで預けた荷物を受取り、さあ飛行場へ向かうかというとき、角井氏が「おみやげ買っていかなきゃ！」と騒ぎ出した。何を言っておる。私なんぞは、山のようにおみやげをもっているぞ。カフェでちょろまかした角砂糖、行きのアエロフロートでの昼食のスプーン、市場で買ったアンコウ型のじょうろなどなど……「そりゃ、ワキタさんは遊びまくったからだよ。私なんぞはシンポジウム会場で一言一句を聞き逃さないようにしていたから、まだ何にも買ってないよー。」になったと本当におみやげをもってい

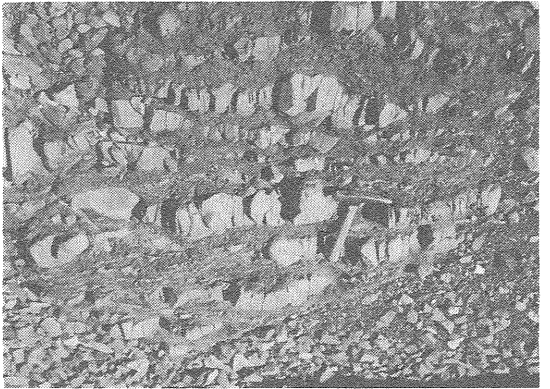


写真10 アムールコンプレックスの砂岩泥岩互層（変形により、砂岩は膨縮し、ときに、ちぎれちぎれになっている）

ない。本当は会場の椅子に大きいお尻がはまったまま出られなかったのだろうが、いいわけが可愛い。可愛想なので一緒にみやげもの屋にでかけた。出発2時間前のことだった。

### さらばソ連、さらばハバロフスク

シンポジウムそして巡検と青空に恵まれたが、帰る日になってついに雨になった。短い滞在だったが、いざ帰るとなるとお名残り惜しい。折からの雨でその気分は一層強まった。ハバロフスクの空も美男の日本人との別れに涙しているようだった。

ハバロフスク空港は、帰りの乗客で溢れている。私は背中に背負った6.5kgの岩石試料が無事税関を通過するかしらん、と心配していた。ソ連から許可なく岩石は持帰れない。私はシンポジウムの組織委員会に再三許可証の発行を申し出たが、いまだにもらっていない。税関に連絡しておくからという組織委員会の言葉だけが頼りだ。税関が開いて、列が動き始めた。私が通りかかると



突然荷物を置いて左に寄るように指示された。しまった。もうだめだ。美濃帯そっくりのこの石たちとここでお別れしなくてはいけない，そう思った。次の指示がないまま，数分が経った。「あのう，これからどうすればよろしいんで？」おそろおそろ尋ねてみた。「えっ？ 通っていいよ，左から。」とそっけなく言われた。そうか私のところから係官が左右二人になったんだ。私の大切な石とその持主はそのまま何事もなく，税関を通り抜けた。

帰りの飛行機は案の定ロシア料理の昼食を積んでいた。「今日でおわーかれね。もう会えなあーい。」と口ずさみながら，飲み込むように平らげた。眼下には，雲がたちこめ，何も見えない。どこまでソ連で，どこまで日本なんだろう。そう思っはてしのない雲の原をみると，本当に国境などないように思えてきた。そう

だ，私は何をみてきたのか。日本の美濃帯や四万十帯の地層そっくりな地層を沢山見てきたではないか。地質には国境などないのだ。たゆとう雲はそう私に語りかけてきた。

### エピローグ

我が家へ戻ると御馳走が待っていた。

「わあー！ 刺身だあ，焼魚だあ。こっこれ，もしかしてみそしるじゃない？ なっつかしいなあ。えっ，うっそう！ 白米じゃん！」

たーいや ひらめが 舞い戻り  
ただ なつかしく うれしくて  
目ーにも止まらぬ 食べ方だ！

「日本はやっぱり豊かな国だなあ。食べ物は豊富だし，私に釣り合った美人もいるし，……」，と振向くと，わが妻は「釣り合ってますせん！」と目を釣り上げて，返す言葉で，「おみやげは？」と聞いてきた。

「いやあ，アメリカと違ってソ連は物がなくてねえ，ほら，ソ連のカフェで残した角砂糖。こっちがアエロフロートの昼食のナイフとフォーク。こっこれなんかどあ？ アンコー型のじょうろ。たれたお髭が可愛いでしょ！」

「さっき小嶋さんの奥様から，毛皮の襟巻をおみやげに貰ったってうれしそうな電話があったわよ。」

「えっ？ えりまき？ あったかなあ？ そりゃあエリマキトカゲの置物のことだときっと。」

と，あれこれ言い訳している先から料理が次々と片付けられてゆく。

「待て，まだハマチが，アマエビが……」

しばらくして台所から新しい皿がひとつやってきて，ポンッとテーブルに置かれた。

「デザートよ！」

置かれた皿にのっていたのは，真っ赤に熟れたあの“トマト”だった。